

地下の正倉院

平城宮第一次

大  
DAI

極  
GOKU

殿  
DEN

院  
IN  
の  
す  
べ  
て

地下の正倉院  
平城宮第一次大極殿院のすべて

奈良文化財研究所創立六十周年記念 平城宮跡資料館 秋期特別展

60

## ごあいさつ

本年、奈良文化財研究所は設立60周年を迎えました。

奈良文化財研究所は、1952（昭和27）年、文化財の宝庫、奈良の地で、美術工芸、建造物、歴史の研究者が、実物に即した文化財の総合研究をおこない、その成果を文化財保護行政に活かす目的で設立されました。

現在は、遺跡の発掘調査、保存、整備、活用に関する調査研究が主要な業務となり、対象も日本のみならず海外へも広がりました。これらの多彩な業務のなかでも、平城宮跡の発掘調査は50年以上にわたり、最も長期的に、重点的にこなされてきています。

平城宮とは、奈良時代の都である平城京の中軸です。奈良時代前半の平城宮には、天皇が出御する大極殿を中心建物とする、築地回廊に囲まれた広大な空間－第一次大極殿院がありました。奈良文化財研究所では、1959（昭和34年）以降、47回にわたってこの跡地の発掘調査をおこない、全貌をほぼ明らかにしました。本展では、発掘調査成果のすべてを覆縮してお見せいたします。

また、蓄積された発掘調査成果が結実して、2010年には第一次大極殿復原建物が堂々完成しました。遺構がわずかにしか残っていないなかったため、重層の威容が復原されるまでの過程には、現存する木造建築や、絵画資料なども対象として、緻密な研究が積み重ねられました。その一端もご紹介いたします。

最後になりましたが、今回の展示にあたり、ご後援・ご協力いただきました各位に心から御礼申し上げます。

2012年10月20日

独立行政法人 国立文化財機構  
奈良文化財研究所  
所長 松村 恵司

1. このリーフレットは、奈良文化財研究所創立60周年記念・平城宮跡資料展平成24年度特別展「地下の正倉館・平城宮第一次大極殿院のすべて」（平成24年10月20日～12月2日）にあわせて作成したものである。
2. 本特別展は当研究所企画調整部展示企画室が企画し、御城跡館調査部、研究支援部連携推進課の協力を得た。
3. 本書の編集は、企画調整部展示企画室中川あや・渡邊淳子が担当し、芝 幹が編集した。本文の執筆は奈良文化財研究所所員の協力のもと、中川・渡邊が、木彫の□図は御城跡館調査部史料研究室渡辺真宏がおこなった。遺物の写真は、企画調整部写真室の中村一郎・鎌倉 綾、西大寺アト・杉本和樹が撮影した。
4. 木彫の写真は、原寸の約75%に縮小して掲載した。写真下のアラビア数字は、今回の展示における通し番号を示す。
5. 本展以外の遺物の写真は縮尺不統一である。
6. 木彫は、保存に万全を期すため、会期中約2週間ごとに2回の展示替えをおこなう。
7. 今回の展示にあたっては、以下の機関のご後援を得た。記して謝意を表す。  
文化庁・国土交通省近畿地方整備局奈良歴史公園事務所・奈良県教育委員会・奈良市教育委員会・奈良新聞社・近畿日本鉄道株式会社・奈良交通株式会社・木彫学会



だいごくでんいん

# 大極殿院 完成前夜

遷都時、大極殿は未完成だったー

# I 大極殿院の時代

奈良時代前半の平城宮で、最も重要な儀式空間

## 大極殿院のようす

奈良時代前半、国家で最も重要な儀式がおこなわれた平城宮第一次大極殿院。この空間が具体的にどのような場であったのかみてみよう。

大極殿院は築地回廊で囲まれた空間で、その規模は南北約三一九・五m、東西約一七七・五m。甲子園球場一・五個分に相当する広さである。内部は広大な広場となっており、地面には全面に小石が敷き詰められていた。中心建物である大極殿は礎石建ちの大型重層建物で、背後に後殿をしたがえて、大極殿院の広場北側に設けられた壇上にそびえ立っていた。また、南面する築地回廊の中央には門（南門）が、その両脇には楼閣建物（東楼・西楼）が付設され、壮麗な景観を誇っていた。朱塗りの柱に漆喰の白壁、漆黒色の瓦葺きという極彩色を放つ建物が建ち並ぶさまは、訪う人々を圧倒したことだろう。

大極殿院の性格とその重要性を考えると、藤原京からの遷都後、いち早く造営が着手されたはずである。ところが、南面築地回廊基壇の整地土中から出土した一片の木簡により、遷都時、大極殿院が未完成であったことが示唆されている。奈良時代は、随の音響くなかで暮らしたのである。



## 完成した大極殿院の復原イメージ

大極殿は和朝8年(715)正月には完成していたらしい(『続日本紀』)。このイラストのように、東西楼閣まで整備されるのは、もっと後のことである。

## 南面築地回廊の土層断面図

発掘調査で明らかになった築地回廊の基礎部分。地山の上に整地土を敷き、回廊の中心にあたる部分を残して南北両側に掘込地梁を施している。この整地土から和朝3年の年紀を持つ木簡が見つかった。





(裏面赤外線写真)



1



(表) 伊勢国安濃郡阿<sup>万</sup>里<sup>斗</sup>部身  
(裏) 和銅三年正月



8

癸卯年太宝三年正月宮内省<sup>八</sup>西<sup>人</sup>年  
慶雲三年丁未年慶雲肆年孝服



5

(表) 大井里委文部島<sup>口</sup>  
(裏) 米五斗



14

(表) 伊勢国安濃郡限  
(裏) 里人飛鳥戸橋万呂五斗

## 造営期の木簡

大極殿を造営する際に運び込まれた整地土（造成土）から見つかる木簡は、その造営時期や過程を考える大事な手掛かりとなる。

五頁の木簡は大極殿院南面、西接の建つ築地回廊周辺の整地土で出土した。

1 は南面回廊の基礎の下から出土した、伊勢国安濃郡（今の三重県津市付近）から納められた物品の荷札。品目、数量は不明であるが、下端を失わせる形や、14のと同じ伊勢国の米と考えられる五斗の荷札が近くで見つかっていることから、米の荷札とみられる。

1 には品目、数量がない代わりに、14 がない年月が記されている。和銅三年（七一〇）はまさに平城遷都の年。この木簡の発見は、大極殿院造営予定地の造成が遷都直前までおこなわれていなかったという予想外事実を明らかにした。「新日本紀」の記述も含めて考えると、大極殿そのものの竣工は和銅八年（七一五）まで遅れる可能性が高い。

海部郡前里  
阿曇部都祿 軍布廿斤

不知山里伍五斗八升



17

(表) 三川国飽海部大鹿部里人  
(裏) 大鹿部塩御調塩三斗



18

(表) 丹波国水上郡石<sup>石</sup>里笠取直子万呂一依納  
(裏) 白米五斗 和銅〇年四月廿三日



15

6

## 造宮期の木簡

周辺からは、ほかにも5など米の荷札の出土がみられる。造宮に従事した役民の食料として米が消費されたあと、いらなくなった荷札はそのまま投棄され整地土に紛れ込んだのだろう。役人の事務作業というより、作業現場を彷彿とさせる木簡の出方である。

その中には8はやや異質の内容で、役人の履歴書風の記載がある。干支年と年号を併記しながら、大宝三年(『癸卯年。七〇三』に宮内省に出仕してから、慶雲四年(『丁未年。七〇七』に親の喪(孝服)にあつて、一時辞職するまでの経歴が書かれている。

六・七頁の木簡は、第一次大極殿院東南隅と内裏外郭西南隅に扶まれた谷部から出土したもの。大極殿院回廊周辺の整地土の木簡と違い、造宮直前の地表面と整地土の間に堆積した建築用材の破片や、はつり屑、楡皮などの中に含まれていた。

和銅二年(七〇九)年から和銅三年(七一〇)までの年紀をもつ木簡を含み、第一次大極殿院の整地土の木簡と同様に、第一次大極殿院から内裏外郭にかけての地域の造宮過程を知ることのできる資料である。

荷札木簡が多いという点は、大極殿院の整地土の木簡と共通した性格をもつが、米のほかにも、6の軍布(海邊(ワカメ)の古い表記で、隠岐国の木簡に顕著にみられる)や18の塩など、多様

綾郡宇治郡里宇治郡阿弥渡



12

(右側面) 車持若麻呂  
(裏) 車持若麻呂



13

淡淡河推推陽雷  
推海梅推海物物譲讓



7



(表) 鞆甘部郡徳部越中国讃岐国  
(裏) 津伎国針間国近江国



19

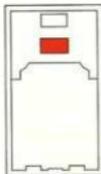
な品目がみられ、また削屑が含まれる点も様子が異なる。

大極殿の整地土に伊勢国の米の荷札がままとまっていたように、この地域でも同じ郡の荷札がままとまる傾向がある。15の丹波国水上市はその一例。これらは同じ地域から納められた米が一括して保管されていたことを示すとともに、役民の出身地とも関係があるかも知れない。

17の「不知山」(いさやま) 諫山、18の大鹿部(おおかべ) 大壁、19の針間(はりま) 播磨) や穂(ほ) 宝飯。後に宝飯) など、音仮名や訓仮名を目在に用いた地名表記も特徴的で、和暦六年(七二二)に意味の良い漢字二文字を用いるようになるより前の、実際の地名表記がわかる貴重な資料。

7は「千字文」という「論語」と並ぶ手習い用テキストの一節が書かれた木簡。整地後に建物を建てる際に柱穴に入つたもの。

<調査回数>  
第69次調査(1970年)  
第72次調査(1971年)  
第295次調査(1998年)



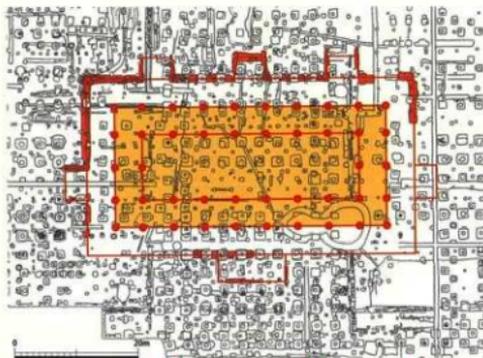
# だいいちじだいごくでん 第一次大極殿

大極殿院の中心、その名も北極星にちなむ一

## 大極殿とは

大極殿とは、即位や元日朝賀といった国家的儀式や外国使節の謁見の際に、天皇が出御する建物である。建物内には高御座が据えられ、南側に立ち並んだ臣下を見下ろした。この大極殿は中国の制度にならって建てられ、その名も宇宙の中心である北極星(大極星)に由来する。

平城宮大極殿の使用が記録上最初に確認されるのは、遷都から運れること五年、和銅八年(七一五)の元日朝賀である。この建物は藤原宮の大極殿を移築したと考えられており、そのために完成まで時間がかかったのだろう。



第一次大極殿遺構平面図 (■) 地覆石掘付・抜取痕跡、(○) 建物の規模、(●) 柱推定位置

## 基壇規模推定の決め手となった 地覆石抜取痕跡

大極殿解体時に、基壇外装最下段の地覆石を抜き取った痕跡。幅40～50cm、深さ15cmと残りがわずかであった。



西面の地覆石抜取痕跡 南から



第一次大極殿の遺構 建物の西半分。人は柱の位置。北西から

## 第一次大極殿の発掘調査

第一次大極殿に調査のメスがいったのは一九七〇年のこと。建物東半分にあたる部分の調査であった。ただし、この時点で当地は奈良時代前半の内裏として認識されており、障子壁や奈良時代後半の総柱建物群など、予想外の遺構の出現に混乱していた様子が記録されている。

その後、一九九八年には建物の西半分を広く発掘調査し、大極殿の全面の様子が明らかにいった。とはいえ、出てきた遺構は基壇外装に使われた地覆石の掘付痕跡と抜取痕跡の溝のみ。基壇そのものや礎石などは、奈良時代後半の建物群や後世の開発によってすっかり失われてしまっていた。

しかし、この溝を手がかりに、大極殿の大きさや構造を推定することができた。基壇は東西五三・二m、南北二八・七mで、階段が南面中央に一基、北面に三基、東西中央南寄りに一基とつづく。そして、柱の位置も、北面と東西面の階段の幅から、東西九間、南北四間(身舎は東西七間、南北二間)の建物と考えられている。

**復原された第一次大極殿**  
 二〇一〇年、平城遷都二二〇〇年祭にあわせて復原された、内部には、天皇の玉座である高御座の実物大複製と、復原に関する展示がある。



#### 鬼瓦

鬼の全身を表した1式Aとよばれるもの。大極殿院の建物のみならず、奈良時代前半の平城宮では全般に、この型式の鬼瓦が採用された。

#### 大極殿に葺かれていた瓦の色

大極殿院の建物に葺かれていた軒瓦は、平城宮の他所の瓦よりも黒味が強い。唐長安城の宮殿の瓦は黒色で表面が磨かれており、それを模倣したと言われるが、実際には残念ながら似て非なるものになっている。

#### 軒丸瓦（上）と軒平瓦（下）

大極殿院のために創案された軒瓦の組み合わせ。平城遷都が決まってから、まもなく生産が開始された。



ひがし ろう

## 東楼

<調査次数>

第77次調査 (1973年)

奈良時代前半の内裏の南方と想定して始められた発掘調査で、予想外に現れた総柱建物。あまりにも大きい掘立柱採取穴（柱を抜くために掘られた穴）は、当初井戸かと誤認されたほどだった。

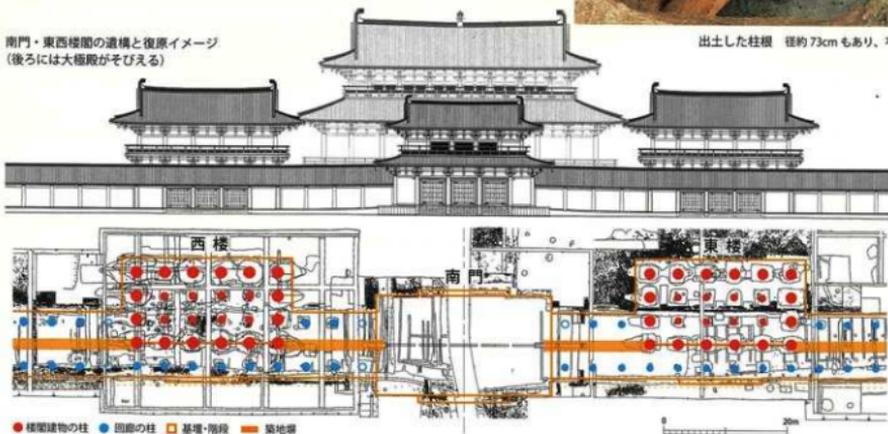


出土した柱根 径約73cmもあり、平城宮で最大



楼の遺構 東から矢田丘陵を望む。奥には平城宮跡資料館。現在の研究所（当時は奈良奈良病院）がみえる

南門・東西楼間の遺構と復原イメージ  
(後ろには大極殿がそびえる)



● 楼間建物の柱 ● 回廊の柱 □ 基礎・階段 ■ 築地帯

0 20m

南門は、大極殿の正門であるとともに、天皇が出御し叙位や饗宴がおこなわれる場でもあった。発掘調査で検出されたわずかな遺構から、基礎の規模は東西約二・八・四m、南北約一・六・三mの礎石建ち建物に復原される。

### 儀式にも使われた正面建物群

## 南門

<調査次数>

第77次調査 (1973年)

第389次調査 (2005年)



単層築 (東西5間×南北2間)



重層築 (東西5間×南北3間)



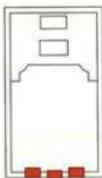
南門北面階段の地覆石と外側に広がる礎敷き 南から

南門の遺構は、ほとんど全て失われていた。残っていたのは基礎外装の一部である地覆石の採取痕跡、階段の痕跡、雨落溝、掘込地帯などに限られる。これらの少ない情報から建物を復原するために、現在、単層か重層か、さまざまな議論を重ねている。

※本頁中の建物立断面は(財)文化財建造物保存技術協会作成のものの一部改変

# なんもん どうざいろうかく 南門・東西楼閣

大極殿院の正面を荘厳した一



にし ろう  
西楼

<調査次数>  
第337次調査(2001・2002)

南門をはさんで、東楼と対称の位置にあるとみられた西楼。予想通り現れた巨大な礎立柱抜取穴からは、多彩な遺物が出土した。

「高殿」(樓閣)と書かれた木簡  
「里工作高殿料短枚柎二枚」



西楼の遺構 人は柱の位置。北西から長屋王邸跡を望む



礎立柱の抜取穴に捨てられていた礎石

東西楼閣の建物は、内側の柱を礎石建ち、外側の柱を礎立柱とする。内側と外側では柱の太さが異なり、外側のものは屋根の荷重を直接支えたため巨大であった。

## 楼閣は後からつくられた

遷都当初、大極殿院に楼閣建物はなく、途中で、南門の両脇の築地回廊を一部解体し、楼閣建物が増設されたことが、発掘調査によって明らかになった。その時期は、出土木簡から、天平3年(731)頃とされる。

東西楼閣は、王権の威信を示す高層建物であるとともに、特別な儀式の場としてもつくられた。発掘調査によって、基壇の規模は東西約二七・六m、南北約八・九m、東西五間、南北三間の、礎石と礎立柱を併用した重層建物が復原される。大極殿院の他の建物は全て礎石建ちであるなか、きわめて特殊な構造といえる。



## 東西楼閣に葺かれた瓦

礎立柱の抜取穴には、葦を幹った瓦が捨てこまれていた。そのなかで、箱物の陶木の上に葺かれた陶木葺瓦(前列2点と中列左3点)は、重厚でありながら流麗な文様をもつ、往時の壮麗な楼閣建物を偲ぼせる資料である。



檜木 (東様)  
用を足したとき、おしりを拭う木切れ。  
(長さ約16～22cm)

### 種類豊富な木製品

遺物のなかで、特に目立つのが木製品。箸や杓子などの実用品から祭祀関連のものまで、実に多彩。東西楼閣あわせて約2500点出土している。



食膳具・容器 (東様・西様)  
箸、杓子、角鉢  
(杓子の長さ31.6cm)



西様の柱抜取穴

## 東西楼閣の掘立柱抜取穴から 出土した遺物

大型の高層建物であった東西楼閣。解体時、掘立柱を抜き取るために掘られた穴もまた巨大なものであった。穴の大きさは南北幅3.5m、東西幅は6～9mと細長く、深さは2.4～3mと、掘えられていた柱の巨大さを物語る。この抜取穴からは、木製品、土器、瓦、木屐など、さまざまな遺物が数多く出土した。楼閣は西宮が造営される頃、解体されたことが分かっている。抜取穴から出土した遺物は、解体時およびその直前の国家の中核の様相を示す貴重な資料である。



有孔小円板 (東様)  
紡錘車(糸紡ぎの用具)か。  
(径4.1cm)

### 土器類 (東様・西様)

主に須惠器・土師器の食器や須惠器甕が出土した。楼閣の警備にあたった兵士が使用したものか。須惠器転用碗(前列右)、土師器灯明器(中列手前左)があるのも特徴。



### 鬼瓦 (東様)

鬼の顔面を表現したIV式Bと呼ばれるもので、東西楼閣が建てていた時期よりも新しいとみられる。廃絶の時に他所から紛れ込んだのだろうか。



### 建築部材の雛形 (東様)

組物 (柱の上) にあり軒を支える部分) のミニチュア。部材の内容から、三段階で軒を支える「三手先」だったことがわかる。実際の建物寸法の10分の1で作られている。建物の雛形が、東様内に安置されていたのかもしれない。



### 鳥形 (東様)

鳥は動物の形代の中でも、ポピュラーなもののひとつ。(長さ5.8cm)



### さまざまな祭祀具

人や鳥、刀をかたどった形代や、地面に刺して結界を示したとされる斎串が見つかっている。一口に「祭祀」といってもその用途・目的は様々である。

### 人形 (東様)

よくみると、おへそまで描かれている。(長さ15.7cm)



### 櫓扇 (東様)

重ねると先端が丸く弧を描くよう加工されている。(長さ30.4cm)



### 斎串 (西様)

西様の柱抜取穴から多量に出土した。いずれも、上端は一方から斜めに切り落とし、下端は尖っている。このタイプの斎串は、建物の農産・解体時に伴う祭祀に使われたのではないかとされている。(長さ約26~30cm)



# 木簡 楼閣 掘立柱抜取穴の



27

(表) 天平勝宝□年□月□日合  
 丸子豊宅丸子豊額丸子友注丸子友依  
 丸子□□  
 (裏) 丸□夫天文  
 丸子豊宅丸子大田而  
 丸子豊宅丸子刀千  
 丸子豊宅丸子豊宅  
 丸子豊宅丸子豊宅



33

(表) 大殿守四人 □□  
 (裏) 大殿四人 右五人  
 々々々々



34

29

(表) 應修理正倉□  
 (裏) 右「東長山 山田郡」  
 々々々々 々々々々



37

東西楼閣の掘立柱抜取穴からは、木簡も多数出土した。東楼は天平勝宝五年（七五三）、西楼は天平勝宝四、五年の年紀のある木簡を含む。内容にも共通性があり、東西の楼閣がこの頃同時に解体されたことがわかる。

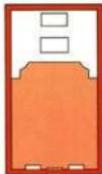
なお、第一次大極殿跡地に建設された西宮の南限は、楼閣のあった南面築地回廊部分よりもずっと北に位置していて両者は直接は関係しない。このため、東西楼閣の解体時期は西宮造営開始の直接の指標とはならない。

十四頁は東楼の掘立柱抜取穴、十五頁は西楼の掘立柱抜取穴の木簡である。東楼・西楼とも、門や大殿（33）などの警備の分担記録など、宮城を守る兵士に関わる木簡が多い。役所名としては、28、34の衛門府、29の授刀所（近衛府の前身授刀衛に連なる機構か）、25の右兵庫（兵器の保管を担当）のほか、左衛士府も見える。

現業部門ばかりでなく、下級役人の事務作業や生活を示す木簡もある。西楼からは、兵士の名簿に由来するとみられる端正な楷書の人名の別刷が多数見つかっている。30は、日常の事務作業に伴う文書を巻き付けた題籤輪の断片。天平十九年（七四七）から使い始めたことがわかる。

27は陸奥国とのつながりの強い丸子姓の人名を列記した木簡の余白に文字





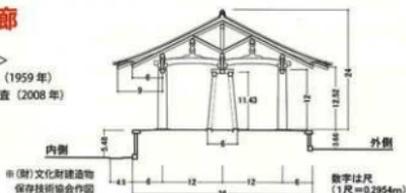
# かいろう ひろば 回廊・広場

聖域を構成する線と面一

## 回廊

<調査回数>

第2次調査 (1959年)  
第438次調査 (2008年)  
等多数



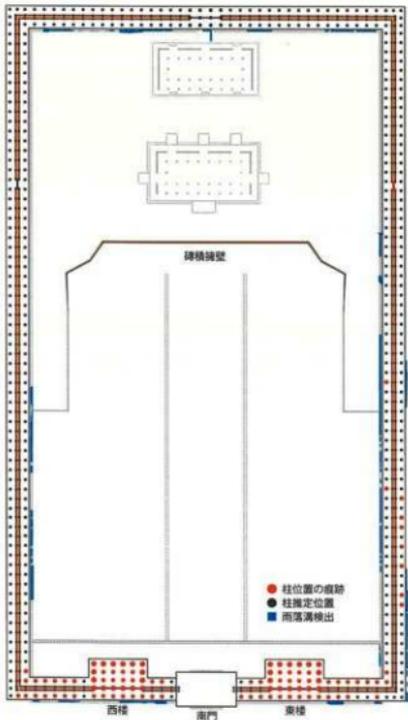
回廊復原案 (平成14年度)

## 復原された回廊の姿

大極殿院の他の建物同様、回廊遺構の大部分は失われていた。残されていたのは、一部の基礎土、側柱の礎石抜取痕跡、雨落溝、掘込地盤と限られる。復原される基礎の幅は約10.6m。築地塙をはさんで院の内外2.7mほどの幅の通路を人々が行き交ったことになる。

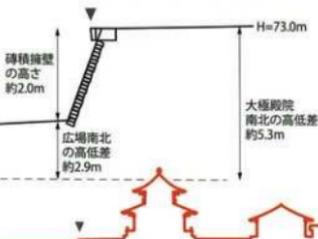
## 長大かつ重厚な区画施設

大極殿院を取り囲む区画施設は築地回廊とよばれ、中央が築地塙、その両側が通路になっている複廊形式をとる。宮殿建築において最高クラスの区画施設であり、奈良時代前半の平城宮では、第一次大極殿にしか採用されていない。発掘調査によって、恭仁京遷都の際には、東西面回廊が解体・移設され、その空白を埋めるために掘立柱塙が設けられたことも判明した。その後、平城京に遷都した際にも、築地回廊が再建されることはなかったらしい。さらに奈良時代後半の「西宮」造営と前後して、南面回廊と南門、東西楼閣は解体されてしまった。



## そびえたつ礎石擁壁

礎石は最大7段しか残っていなかったが、当時は25段ほど積まれていた。使用される礎石は短辺15~16cm、長辺約30cm、高さ約8.5cmと現在のレンガより大きい。積み方は、長辺を正面にして目地を1段おきにそろえる長手積みを基本とする。擁壁の屈折点では、隙間を作らないように斜めに打ち欠いたり、小口面が正面になるように積んだり、当時の職人の工夫を積み取ることができる。





大極殿からみた広場のようす

壇上に建てられた大極殿から南を見下ろすと、このような風景が広がっていただろう。南門の向こうには朝堂院、朱雀門、そして朱雀大路がすすんでみえる。

(東西極殿が増設される前の大極殿院、南門は単層案を採用)

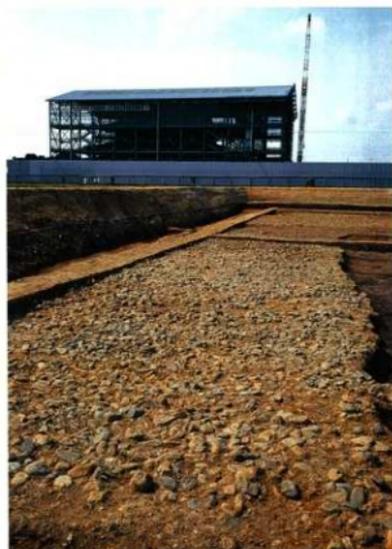
イラスト：早川和子

## 広場

<調査回数>  
第72次調査(1971年)  
第75次調査(1972年)等

### 広場の礎敷き

奈良時代前半、広場内の舗装は3度やりかえられた。遷都当初は径5~10cmの礎、東西接閣増設時には、南面築地回廊周辺に径2~5cmの礎、遷都前後には、径2cm以下の細かき礎、発掘調査員泣かせの仕事ぶりである。



一面に礎敷きが現れた。2009年、復原大極殿いまだならず

大極殿院は南に向かって緩やかに傾斜する空間であった。北約三分の一は一段高い壇になっており、壇の上には大極殿と後殿が南北に並び立っていた。壇の東西両端には斜道(スロープ)が設けられ、南側の空間へとつながる。この壇の南側は広場になっていて、儀式の際に五位以上の貴族が列立する空間であった。

壇の立上がり部分には、黒灰色の磚(レンガ)を積み上げた擁壁(磚積擁壁)が築かれた。磚積擁壁は高さ約2m、東西約10mにわたる直線的に伸びる大極殿の荘厳装置であった。

広場は、礎(小石)を敷き詰め、舗装されていた。発掘調査ではこの礎敷きが良好に検出された。当時の官人達が立ち並んだ地面がそのまま現れたのである。

### 官人が立ち並んだ広大な広場

### 磚状飾板

磚積擁壁付近で出土した。  
壇上の高欄の礎石だろうか？



### 院内南北の高低差

最重要の儀式空間・第一次大極殿院を設ける場所として、高燥地である丘陵の支脈の上が選ばれた。高い部分は地山を削平し、低い部分には盛土を施し、北から南に向かって緩やかに傾斜する地形を整えた。大極殿をもっとも高い場所に据えるための、入念な計画がうかがわれる。

H=67.7m

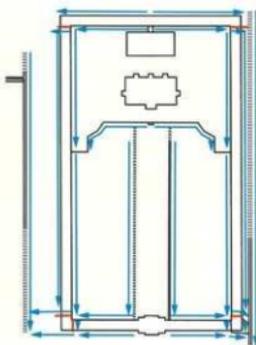
東西溝



## 広場の排水計画

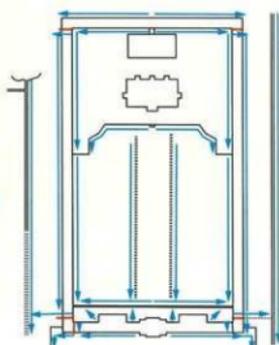
儀式の場であった大極殿院にとって、排水は死活問題であった。発掘調査によって、当時の人々が排水工事に苦心した様子が明らかになった。

→ 水の流れ  
→ 木樋暗渠 (地下排水溝)



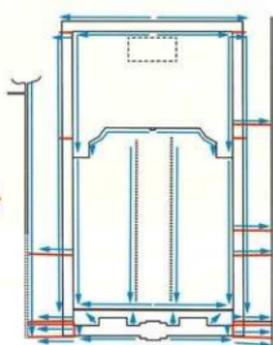
### ① 遺当初

北から南に下がる原地形を活かしたシンプルなもの。北からの水は、南面回廊の雨落溝へ集まり、東西に流れていく。



### ② 東西楼閣増設時

楼閣により南面回廊北雨落溝が機能不全に。代わりに東西溝を新設し北からの水を受け、溝南側の傾斜を南から北に下がるよう変更。



### ③ 幕仁京から遷都後

東面・西面ともに新たに木樋暗渠を増設し、それぞれ基幹排水路まで接続。院外への排水の強化を図る。



木樋は最大7本連結されていた。西から若草山をのぞむ

大極殿院は北から南に降るよう傾斜しており、基本的な排水の方向も南に流れるよう計画されていた。東西方向の排水も広場の中軸上が一番高く、東西へ振り分けられていた。院外への排水のためには、長い丸太を削り抜いた木樋を埋めた暗渠を設け、入念な排水計画が完成したかに見えた。ところが、東西楼閣が増設された際に、大問題が生じたのである。南面築地回廊の北雨落溝が楼閣の基礎によって分断され、北から流れてきた水の受け皿がなくなってしまう。そこで、新たに排水溝を設けたり、地面の傾斜を変えるなどといった対応を迫られた。また、幕仁京から遷都した後も、引き続き排水設備を強化している。大極殿の機能が失われてからも、当地が重要であったことの証左であろう。

## 頻繁におこなった排水工事



### 掘立柱から木樋へ

暗渠に掘えられ下水管の役割を果たした木樋は、最大で7mを超える長大なもの。しかし、なぜか不必要な長方形の穴があき、それをふさぐ栓がはめ込まれていた。実はこの木樋、前世は藤原宮の大埋の掘立柱とみられる。遷都の際に地上から地下へと転身を果たした。

# 大極殿院 周辺

造成に造成を重ねる一

## 大極殿院北西辺は軟弱地盤

第一次大極殿院は、東西対称に整然と建物が配置された空間と考えられてきた。ところが、発掘調査の結果、西面回廊北寄りの遺構は想定位置よりも西側にずれ、遺構面の標高も東面回廊に比べて低いことが次第に明らかになった。検討を重ねた結果、この現象は第一次大極殿院の北西部が谷筋に当たり、平城遷都当初、その低い部分に最大で2mもの整地土を施し、平坦面を設けたためと判明した。整地土が軟弱であったために、時代とともに遺構が沈みこんでしまったわけである。



## 大極殿院西辺・佐紀池南岸

大極殿院西辺・現在の佐紀池南岸の一带は、大極殿院の東西様閣増設工事と時期を同じくして、園地とそこから走る西基幹排水路の造成がおこなわれた。遷都後しばらくしてから、大極殿院の南側でも西方でも、大工事が始められたことになる。



園地の築造に伴って敷かれた瓦敷き東西様閣増設にもなっており一部解体された南面回廊の瓦の可能性もある

## 幸せを呼ぶ!?呪符木簡

病氣平癒が疫病除け祈願のまじない札とみられる木簡表には四つ葉のクローバー状に人名「太郎若万呂」と呪句「天剛(遷)北斗七星のこと」を、両側面には様々な効果を願う呪句「急々如律令」を記す。厚さ十九mmの厚い楕圓材で、裏面は未加工、材の欠損な使い方が目を引く。平城宮跡の呪符は珍しい。

(右側面) 急々如々律々令々

(表) 太郎若万呂 □河 太郎若万呂

天剛々々 天剛々々

天剛若万呂 天剛々々

天剛々々 長□ 天剛若万呂

(左側面) 急々如々律々令々



# 大極殿院周辺の木簡



供御系十

38



(表) 但馬国 二万部波太郷  
(裏) □□□□□□五斗

59



伯耆国相見郡巨勢郷雑間一斗五升 養老〇年十月

50



参河国芳豆郡比莫嶋海部供奉四月科大費黒鯛六〇

42

大極殿院西辺を南に流れる西基幹排水路やその西側の整地土、さらに大極殿院西側の谷筋に設けられた池（史料にみえる「西池」、今の佐紀池）からは、大極殿院造営時から東西様閣増設時にかけての木簡が見つかっている。

門の警備や夜回りを担当した兵士の名簿や、その組織に関わる木簡がみられるほか、さまざまな荷札が出土しているのが目を引く。

42は参河国幡豆郡比莫嶋（今の愛知県南知多町日間賀島）から四月分の贄として届けられた黒鯛の荷札。内裏北外郭の土坑の木簡によって明らかになった、参河湾の篠嶋・折嶋（篠島・佐久島）による月交替の贄の貢進に、第三の嶋が存在することを裏付けた木簡。但し、比莫嶋からの貢進は、七二〇年代前後に限られた時期の臨時のものかも知れない。

50は伯耆国（鳥取県西部）からの雑贄（さまざまな魚の干物）の荷札。59は但馬国（兵庫県北部）からの米の荷札。周辺からはこのほか、駿河国（静岡県中・東部）の鰯魚、近江国（滋賀県）の米、美濃国（岐阜県南部）の麦門冬（シヤノヒゲ）の根を乾燥させた生薬、若狭国（福井県西部）の塩・米、丹波（京都府北部・播磨（兵庫県南部）・美作（岡山県北東部）・阿波（徳島県）・讃岐（香川県）の米などの荷札のほか、珍しいところでは38のような米（供御）と



47 忍勝火廿五人三〇



56

(表) 尾張国造御前護忍々頓首  
(裏) 頓火 火 火頭 布布口



(表) 常陸那賀郡大伴部弟末呂 巳時  
(裏) 入



40



○五十上子人列十口口口



41

内舎人



46

天皇用を明記する。布・帳帳や薦薦などの調度品の付札も出土している。

47の火は、兵士十人を単位とする組織。忍勝はその責任者火長火長(頭)であろう。41の五十上・十上もそれぞれ五十人、十人を単位とする兵士集団の統率者。

56は尾張国造に火頭が書いた手紙の習書か。「某御前白」として冒頭に宛先を記す七世紀に顕著な書式の木簡。

40は兵士兵衛または衛士衛士かの勤務管理に関わる木簡で、「巳時入」は、巳時(午前十時頃)に勤務に就いたことを示すか。

46の内舎人は、天皇のそばに使える従者。貴族の子・孫から選ばれる。付札状の形態をとるが、その機能は未詳。

# Ⅱ 西宮さいぐうの時代

天皇のすまいとして変貌をとげた空間

## 「西宮」とよばれた宮殿

天平十七年(七四五)の遷都後、大極殿院の機能は東隣地区へ移された。これが第二次大極殿院である。第一次大極殿院の建物は解体されることも、新たな宮殿へと造りかえられた。まず、第一次大極殿院の区画の南北を狭め、北側の壇上に

は掘立柱建物が立ち並ぶ空間を、南側の壇下には広場を整備した。これが『続日本紀』などにみえる「西宮」と呼ばれる宮殿で、のちに称徳天皇がここを内裏として使用したのである。

実は長年、「西宮」の場所は定かでなかったのであるが、二〇〇四年、この南側に広がる中央区朝堂院<sup>（ちゆうどうゐん）</sup>で、称徳天皇の大嘗宮<sup>（たいじやうきう）</sup>（天平神護元年(七六五)の遷構が見られたことが決め手となった。

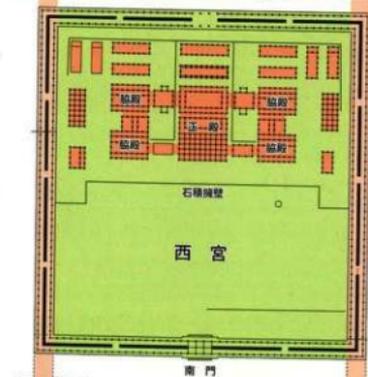
神護景雲四年(七七〇)、称徳天皇はこの宮殿で息を引き取った。西宮は平安時代初期、平城太上天皇によって再び整備されるが、それまでの間の具体的な利用の実態は不明である。

## 西宮の復原イメージ

第一次大極殿院とは打って変わって、檜皮葺き葺棟で白木の柱からなる掘立柱建物が建ち並ぶ。天皇のすまいとして通常の、日本古来の建築といえる。

## 西宮の遺構配置図

南北 186.1m、東西 176.6m の正方形に近い区画へ変更している。隣り合う内裏の区画と同規模であり、強く意識して設定されたに違いない。



中央区朝堂院

（平安時代中期の遺構）

西宮神排水路

1.1

南門

中央区朝堂院

## 瓦は大棟の部分のみ

西宮の建物は、発掘調査で竪立柱建物と明らかになった。しかし、瓦も出土する。総瓦葺きの屋根は礎石建物でないとい構造的に支えきれない。瓦の出土量も多くはなかったことから、大棟にのみ瓦を葺いた葺棟と推定するに至った。



葺棟・檜皮葺の屋根

朱塗りの柱に総瓦葺の第一次大極殿とは全く異なる色彩を放つ（写真は平城宮内裏の復原建物模型）



イラスト：北野昭子



軒丸瓦（上）と軒平瓦（下）

西宮の屋根の頂部を飾った軒瓦。

## 櫛（中央基幹排水路）

現在よく目にする櫛櫛とは違い、縦長で上と下両方に歯がついている。（現存長 20.4cm）



法隆寺所蔵百万塔

## 百万塔未成品（西基幹排水路）

相輪や経典をはめ込む孔があいていないため、未成品であることがわかる。宮内からはこの塔身部の他に、笠の断片とロク口換きした際の残材も見つかった。

百万塔は、天平宝字8年（764）の藤原麻呂の乱の直後に、称徳天皇が国家安寧を祈願し国家事業として製作させた。百万塔工房は、左右2つあったとされる。（現存高 14.3cm）

## ものさし（西基幹排水路）

目盛は、一寸および五分ごとに墨線でつけられている。（現存長 14.8cm）



## 西宮の東西を流れる基幹排水路

西宮の区画の東西には基幹排水路が南北に走っている。これらは奈良時代前半から設けられており、浸淫や改修を繰り返しつつ、宮内の排水に大きな役割を果たしていた。ここからは奈良時代を通じて多くの遺物が出土し、特に種類豊富な木製品は目を引く。

(表) 西大宮正月仏 御供養雜物買戻銭  
(裏) 一貫五百六十文 油五升 正月十六日 添石前



64

薄飯卅七斤 五編



60

蠟燭三籠



61

蒸附志籠 三羽目



65

藤甲織交作附一編



67

### 中央基幹排水路の木簡

西宮の東方を南に流れる中央基幹排水路からは、1500点余に及ぶ木簡が出土している。溝の遺物は投票場所から流されていく可能性があるため、廃棄元の特定が困難な場合が多いが、中央基幹排水路の木簡は、出土地点ごとにある程度内容にまとまりが見られる傾向がある。

中央基幹排水路の両側の遺跡の様子は発掘調査でかなり明らかになっており、西側には、北から大極殿院（宗良時代後半）には推定大膳職、西（宮）、中央区朝堂院、朱雀門内側の広場空間が、また東側には内裏外郭官衙、東区朝堂院西辺官衙、兵部省（奈良時代後半のみ）が展開していた。中央基幹排水路の木簡は、これらの施設の性格を考える大事な資料となる。

64は西大宮（西宮）で行われた正月仏事の用度を購入した残りの銭の付札。中央区朝堂院の南端に近い位置で、中央基幹排水路から枝分かれした南北溝から出土した。

60、63、65、72は、食品名が書かれた木簡。買進者が書かれていないため、保管用のラベルの木簡と見られてきたが、志摩国の穀の可能性が提起されている61、65、68のような下端を尖らせたもの以外も、穀の荷札の可能性もある。

このうち60、63、65、69は、大極殿院東南隅に近い位置の中央基幹排水路のほぼ同位置から出土した。神護景雲三年（七六九）の年紀のある桓徳天皇の時代の木簡が一緒に出土していることから、西宮で消費された食品の付札とみられる。71はこの地点で大極殿院側から流れ込む東西溝との合流点付近で出土したが、一連の遺物とみられる。



押年魚上

62



熬海鼠

71



雑魚楚割一籠

66



雑魚脂

68



角俣

72



水母二斗三升

70



鹿穴

63



伊知比古

69

- 60は薄紙(薄紙)の付札。重さ三七斤(約二五匁)の薄切りのアワビを五束に梱包する。
- 61は鱈の脂(干物)三籠分の付札。
- 62は年魚(鮎)の押しずの付札。
- 63は鹿肉の付札。木簡にみえる肉は、ほかに猪・雉・鴨・鶏がある程度で珍しい。
- 65は、蒸鮑一籠分、三〇個の付札。貝数付きで、「貝」を単位として数えている。
- 66は雑魚の楚割(細長く短冊状に切って乾した干物)一籠の付札。
- 67は、練甲麻(ワ)と和えた(交作)は「ませつくり」、和えること。鮑の付札。「堀」は土器の単位。
- 68は雑魚の脂の付札。
- 69の「伊知比古」はイチゴのこと。イチゴの見える木簡も珍しく、付札はこれ一点しかない。
- 71は、イリコの付札。イリコは海鼠(ナマコ)を干したものだ。
- 70は中央基幹排水路の南端の、兵部省南西隅に近い位置で出土した。クラゲの付札。容積で計量している。
- 72は中央基幹排水路の西側、西宮との間の土坑から出土した。ツノマタの付札。ツノマタは紅藻類の一種。鹿角菜にもツノマタの調があるが、区別されている。

# Ⅲ よみがえる 威容

研究の積み重ねにより姿をあらわした一三〇〇年前の雄姿

## 復原のための手がかりは—

基壇から上の部分が失われていた建物を復原するために、様々な情報が集められた。最初の手がかりとなるのは、第一次大極殿の遺構や出土遺物。第一次大極殿を移築した慈仁宮大極殿の遺構の情報も参考にした。また、各種史料、『年中行事絵巻』などの絵巻資料、現存する古代建築からも重要な情報を得ることができた。

## 瓦

瓦ほど親切なものはない。第一次大極殿の建物を構成する要素の中で、ほぼ唯一、本来の姿のまま、比較的多数に出土するからである。復原する第一次大極殿の屋根には、出土瓦の文様と寸法を忠実に復原したものを葺けばよいはず…。それが、悪戦苦闘するはめに、葺き方まではわからないし、古代人の手作り瓦の寸法には案外バラつきがある。結局のところ、平均的な値と雨漏りしないような瓦葺の間隔から逆算して、復原瓦の寸法が決定された。残りが良くても、復原は簡単ではない。

遷都一三〇〇年にあたる二〇一〇年に、第一次大極殿の復原建物が完成した。完成に至るまでには、膨大な量の復原研究が積み重ねられた。それは、建築史のみならず、考古学（瓦、金属製品等）、美術史（彩色、絵画等）、日本史など幅広い分野にわたる。本展示ではその一部を紹介する。

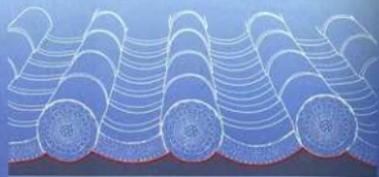
## 階段

第一次大極殿の階段の幅は、遺構から推測することができたが、今度は傾斜がわからない。隣の第二次大極殿の発掘調査では、三角形の凝灰岩が出土し、階段の羽目石かと思われた。この石の角度と、移築先の慈仁宮大極殿の階段遺構から復原される傾斜を比べると、ほぼ同じ。一見ボロボロの石材にも、重要な情報が潜んでいるからあなどれない。





平安宮大極殿  
 大極殿の構造  
 大極殿の構造



## 建物の構造

遺構がわずかにしか残っていない場合、その建物が単層か重層かをどうやって決めるのだろうか？『続日本紀』によると、平城宮には「重閣門」（重層門）があったらしい。となると、より格の高い第一次大極殿は当然重層だったと考えたくなる。平城宮の周囲を見渡しても、大寺院の中心建物たる金堂は、重層か単層装階付き。どちらも屋根は二重だ。これらを踏まえると、第一次大極殿が重層建築であったと考えるのが自然であろう。

## 彩色

軒平瓦の凸面に走る一本の朱線。ともすれば見落としそうになるこの情報から、建物の彩色が復原できる。

というのも、瓦を屋根に葺いた後に柱や部材に丹塗りを施したために、瓦座とよばれる部材と接する軒平瓦にも、丹が付着してしまっただけだ。



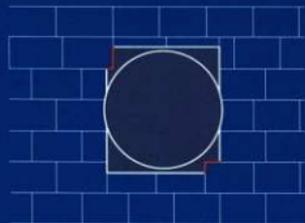
## 扁額

古代寺院の金堂や平安宮では、殿舎と門とにそれぞれ名を記した扁額がかけられることが一般的であった。第一次大極殿の扁額はもちろん出土していないし、古代の扁額の現存例も非常に少ない。ところが、山田寺（奈良県桜井市）の発掘調査で、南門付近から出土した雲形の木製品が、検討の結果、扁額の脚部である可能性が高まった。これが第一次大極殿にもっとも近い時期の扁額というわけで、肩と脚部の意匠に採用された。



## 礎石と敷石

第一次大極殿の発掘調査では、礎石がすべて抜き取られてしまっていることがわかった。そこで、移築先の慈仁宮大極殿に目を向けると、これが情報の宝庫であった。礎石の間をよくみると、意味ありけな欠き込みが二か所ある。これは基壇上面の舗装を反映していると考えた。こうして、年中行事絵巻にみられる平安宮大極殿とは異なり、礎を建物と平行に敷き並べた「布敷」を採用したのである。



年中行事絵巻 巻七御黄衣  
 所蔵 田中孝一 画像提供 中央公論新社  
 上の建物が平安宮大極殿  
 （四半敷）の鋪装かみえる



# IV 大極殿院発掘調査史×奈文研のあゆみ

五〇年にわたる第一次大極殿院発掘の過程と、奈良文化財研究所の歴史をふりかえる

## 「第一次内裏」として

現在の第一次大極殿院地区に、奈良時代前半の内裏があると認識されていた時期



平城宮第75次調査の測量風景  
調査区に杭と貫板を設置して水糸をめぐらせ、水平距離を測る「遠方測量」である



平城宮第2次調査の作業風景  
掘った土をベルトコンベアーでなく、トロロコで運んでいる



1967

回廊の出現  
この地区が築地回廊で囲まれていたことが判明

1959



平城宮第一次大極殿院周辺に初めて調査のメスが入る(平城宮第2次調査)写真は、掘入れ式のように

1960

1963 平城宮跡国有化の方針決定、国道バイパスの宮跡東部通過計画浮上

1962 平城宮跡内での車庫建設問題から、全国的な保存運動がおきる

1952 平城宮跡が特別史跡に



1955 平城宮第二次大極殿院回廊東南隅(平城宮第1次調査)のとき、現地説明会のはりとなる「現地見学会」を開催する



1961 平城宮初の木簡発見(平城宮推定大膳職)

1954 唐招提寺を皮切りに南都諸大寺の調査開始

1966

平城宮は東側に張り出すことが判明

1964 平城宮遺構司

1964～66 平城宮朱雀門、北面築地など宮城四至の確認

1963

平城宮跡発掘調査部発足



1956～59 飛鳥寺、川原寺、飛鳥板蓋宮伝承地など、飛鳥地域での発掘調査開始(写真は飛鳥寺中門と南門の発掘)

## 南都諸大寺

等の調査研究

1952



奈良文化財研究所設立(春日野町旧庁舎)

1954 奈良国立文化財研究所と改称

宮都の発掘調査、はじまる一

1978

山城国分寺金堂跡（恭仁宮大極殿）  
の発掘調査



1978 平城宮第二次大極殿の発掘調査  
恭仁宮大極殿よりも規模が小さいと判明



ここに内裏はなかったー

調査成果の蓄積により、第一次大極殿  
の場所の確定と「第一次内裏」の  
存在の否定がなされた時期

1975～78  
内裏検討会  
第一次大極殿の場所の模索



1970 予想しなかった磚積塼壁や  
「西宮」の柱柱建物の出現

1982



第一次大極殿院地区  
で、初の報告書刊行



1973 東様・南門の出現  
推定第一次内裏の南方から、  
予想外の建物の出現



1971

徹底的に破壊された大型建物  
の存在を認識  
これがのちに第一次大極殿と  
わかる

1980

1980 明日香特別立法公布

1978 「特別史跡平城宮跡保存整備基本  
構想」(文化庁)完成  
以後、野外博物館としての整備の進行

1970

1968 平城宮跡を迂回する  
国道バイパスルートの決定

1968 平城宮東院庭園の存在を確認  
等に関する方策」閣議決定



1984～86 平城京右京八条一  
坊十三・十四坪 鋳造工房発見

1976 この頃より平  
城京城の大規模発掘の  
増加

1976～1982  
平城宮中央区朝堂院



1973 平城宮内裏石敷井戸

1970

平城宮跡資料館開館



1971 薬師寺金堂

1965 遺構展示館開館

考古科学 分野の充実ー

1974 埋蔵文化財センター発足



1978 大宮大寺塔

1972  
全国の遺跡への調査整備  
指導本格化

全国各地の  
遺跡を視野にー



1969 藤原宮南面中門（藤原宮第1次遺構）

1969 遺跡・遺物の保存科学研究の開始

1980 美術工芸研究室を奈良国立博物館へ移管

1973 飛鳥・藤原宮跡発掘調査部発足

1980 本庁舎が二条町に移転

1975 飛鳥資料館開館



1996 第一次大極殿の10分の1模型作成  
(現在奈良市役所にて展示中)

## 第一次大極殿院として-

発掘調査が一段落し、復原整備に向けて動き始めた時期



1980年までの既調査区  
院内の東半をほぼ全て発掘した以降の調査区は、西半の部分的な調査となる(数字は調査回数)

1993

第一次大極殿院地区の復原整備が決定(文化庁)



1993 第一次大極殿院の100分の1模型作成

1989 平城宮第一次大極殿院地区復原整備のための基礎調査開始

1998

第一次大極殿の全貌解明に向けた発掘調査規模が善仁宮大極殿と同じであることが確定

1993 第一次大極殿復原建物の基本設計開始



1986 佐紀池南岸でクローバー呪符木簡を含む多量の木簡出土

1990

1989~2001 西隆寺

1984~90 平城宮東区朝堂院で3期分の大官宮の発見



1989 平城宮朱雀門

1989~90 平城宮式部省・兵部省八省クラスの役所の実体が初めて判明



1987~98 頭塔

1995~2006 大衆院庭園

1989

1986~89 長屋王邸  
長屋王家木簡と二条大路木簡の発見

1997  
~2000

飛鳥池遺跡で巨大官署工房跡発見



1982 山田寺で倒壊回廊発見

国際共同研究の高揚一

1996 遊宴省文物考古研究所との共同研究開始

1991 中国社会科学院考古研究所との共同研究開始

1993 アンコール文化遺産保護共同研究事業開始

# 2010



第一次大極殿復原建物が完成

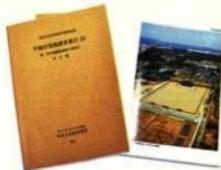


2008 西面回廊の連続的な調査

2001 第一次大極殿の復原工事開始  
(文化庁)



2001 西様の発掘調査



2011 二冊目となる  
報告書刊行



2009 47回に及ぶ第一次大極殿地区の  
発掘調査に区切り

2009

## 復原整備 に向けてー

大極殿復原にむけての補足的な発掘調査と復原研究の積み重ねの時期

2010 第一次大極殿の復原研究始まる

2002 第一次大極殿復原に向  
けての細部に関する復原研究始  
まる(基壇・彩色・木部・瓦など)

1998 第一次大極殿復原建物の実施設計開始

2010

2000

2008 平城宮跡の国営公園化閣議決定

1998 平城宮跡を含む古都奈良の  
文化財がユネスコ世界遺産に

2000



2010 平城遷都1300年祭



2004 平城宮中央区朝堂院  
朝庭で称徳天皇の大嘗宮発見



東院庭園復原整備完了

1998 朱雀門復原建物完成



平城宮跡資料館リニューアル  
オープン

2010



2006～07 高松塚古  
墳壁画の解体修理作業

2000 法華寺阿彌陀浄土院跡

2000～ 藤原宮朝堂院



1999～2002 興福寺中金堂院

2005～ 甘樫丘東麓遺跡

2001 国立文化財研究所から、  
独立行政法人文化財研究所となる

2007 独立行政法人文化財  
研究所から、独立行政法人国  
立文化財機構となる

2004～07 キトラ古  
墳壁画の剥ぎ取り作業

## 新たな研究機関 としてー

2000 河南省文物考古研究所  
との共同研究開始

1999 韓国国立文化財研究所  
との共同研究開始



1997 吉備池廃寺金堂



THE AREA OF  
THE FORMER IMPERIAL AUDIENCE HALL



2012年10月20日

編集・発行 独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町2-9-1

<http://www.nabunken.go.jp/>

表紙デザイン 野中優介

印刷 能登印刷株式会社